

平成14年度

「総合的な学習の時間」の観点から
とらえた修学旅行

< 調査報告書 >

財団法人 全国修学旅行研究協会

1 調査の目的

修学旅行実施基準の緩和や改正が徐々に進む中で、交通機間の発達、さらには体験学習重視の修学旅行等、各学校が特色ある修学旅行の取組みをしている。それ故、近年小・中・高校で実施されている修学旅行が多様化している。

新しい教育が実施されて1年が過ぎようとしているが、新しい教育に取り入れられた「総合的な学習の時間」の扱いについてはそれぞれの学校において特に創意工夫がなされている。その中で 事前学習、事後学習を含めた修学旅行という一連の教育活動において、「総合的な学習の時間」がどのように関わってきているかをとらえ、新しい教育に対応した修学旅行の研究の資料とする。

2 調査内容

別紙

3 調査の方法

E-mail・addressを通して全国の中学校に調査協力の要請と共に調査内容の発信ならびに回答の返信を依頼し、返信された回答をまとめた。

4 対象校

全国の4000校余りの中学校

5 調査集計校数

260校

6 調査の結果

修学旅行のねらいについて（複数回答）

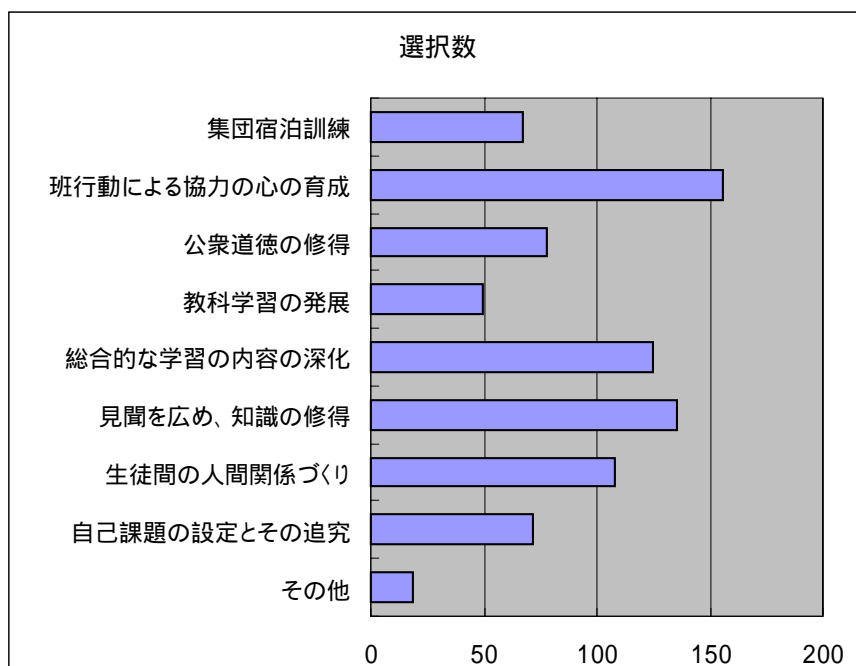
- 1 集団宿泊訓練 2 班行動による協力の心の育成 3 公衆道徳の修得
- 4 教科学習の発展 5 総合的な学習の内容の深化 6 見聞を広め、知識の修得
- 7 生徒間の人間関係づくり 8 自己課題の設定とその追求
- 9 その他

（調査の結果）表中の比率は、各項目の選択数の調査集計数に対する割合（％）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
選択数	67	156	78	50	125	135	108	72	19
比率	25.8	60.0	30.0	19.2	48.1	51.9	41.5	27.7	7.3

< 9 その他の内容 >

- ・ 体験的学習 3
- ・ 平和学習 6
 - 自律心を育む
 - 日本で唯一の戦場となった沖縄での現地聞き取り調査
 - 戦争体験者から聞き取り
 - 現地の方との体験学習
- ・ 研究する力、見方・考え方・味わい方を体験を通して学ぶ
- ・ 職場訪問及び職業体験
- ・ 聖籠町の歴史をたどる
- ・ 古墳を訪れ、日本の歴史的な日本の歴史的な建造物や文化にふれる
- ・ 異文化体験学習、英語学習、日本文化学習(中2)
- ・ 中高一環課程で高校1年に1回実施、目的の第1は国際理解、カナダで10日間のホームステイと観光旅行
- ・ 学区にある東照宮と日光東照宮との関係について(身近な文化遺産に愛着を持って)
- ・ 民宿で分宿による宿泊先の人々との交流で、暖かい人間関係作りを進める
- ・ 中学校生活のハイライトとしてよき思い出
- ・ 自己管理 安全と健康への留意
- ・ 伝統的文化にふれる
- ・ 見聞を広め、知識の修得



< 考 察 >

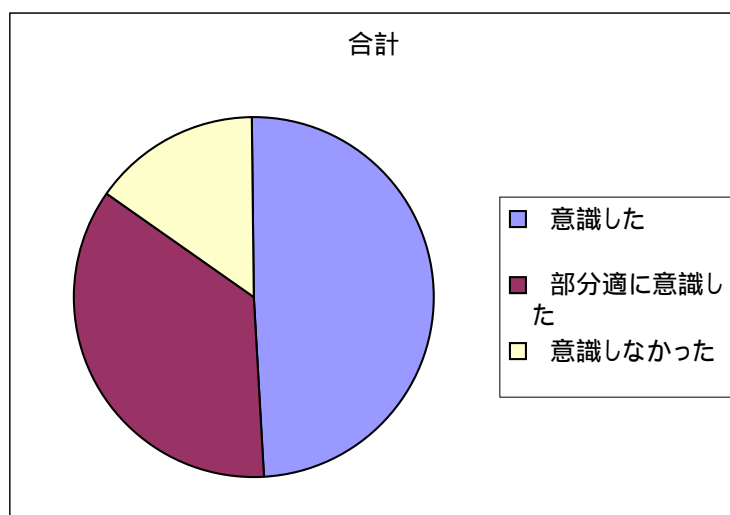
- ・ 班別行動、班別学習を取り入れている学校が多い今日、修学旅行のねらいを「班行動による協力の心の育成」におく学校が最も多い。これは当然の結果であろう。次に「見聞を広め、知識の修得」をあげる学校が多いが、修学旅行本来の意義を生かしているものである。
- ・ 続いて「総合的な学習の内容の深化」が多いが、新しい教育の観点を取り入れたものであり、修学旅行と「総合的な学習の時間」の関わりをどうするかを研究する好材料ととらえ、今後追究していきたい。
- ・ 「教科学習の発展」をあげる学校が少ないのは、教科学習を軽視する結果ととらえるのではなく、むしろ「総合的な学習の時間」との関わりの中で、社会科などの教科の学習が生かされているのではないだろうか。
- ・ 「集団宿泊訓練」と「公衆道德の修得」など、本来修学旅行で重視していくべき内容が少ない方の結果として出たが、これも班行動などを重視することにより、無意識のうちにそれらを含みながら重きを置いているのではないだろうか。

修学旅行と「総合的な学習の時間」との関わり方について

1 意識した 2 部分的に意識した 3 意識しなかった

(調査の結果) 表中の比率は、調査集計数に対する割合(%)

	1	2	3
選択数	127	93	40
比率	48.8	35.8	15.4



< 考 察 >

- およそ半数の学校が修学旅行全体を通して「総合的な学習の時間」との関わりについて意識している結果が見られ、新しい教育に対応した考えを取り入れていることが伺える。
- 修学旅行の部分的なところで「総合的な学習の時間」との関わりを意識した学校を含めると 84.5% にもなり、これからは修学旅行と「総合的な学習の時間」との関わりをもたせていく学校が多くなっていくのではないかと見られる。
- 集計の中で私立中学校は「3 意識しなかった」が最も多かった。(参考)

修学旅行において「総合的な学習の時間」と関わらせた活動内容

(複数回答)

- | | | |
|-----------|-------------|-----------|
| 1 国際理解学習 | 2 情報学習 | 3 環境学習 |
| 4 福祉・健康学習 | 5 奉仕・ボランティア | 6 農山漁村の学習 |
| 7 地域文化の学習 | 8 地域の産業学習 | 9 その他の学習 |

(調査の結果) 表中の比率は、各項目の選択数の調査集計数に対する割合
(%)

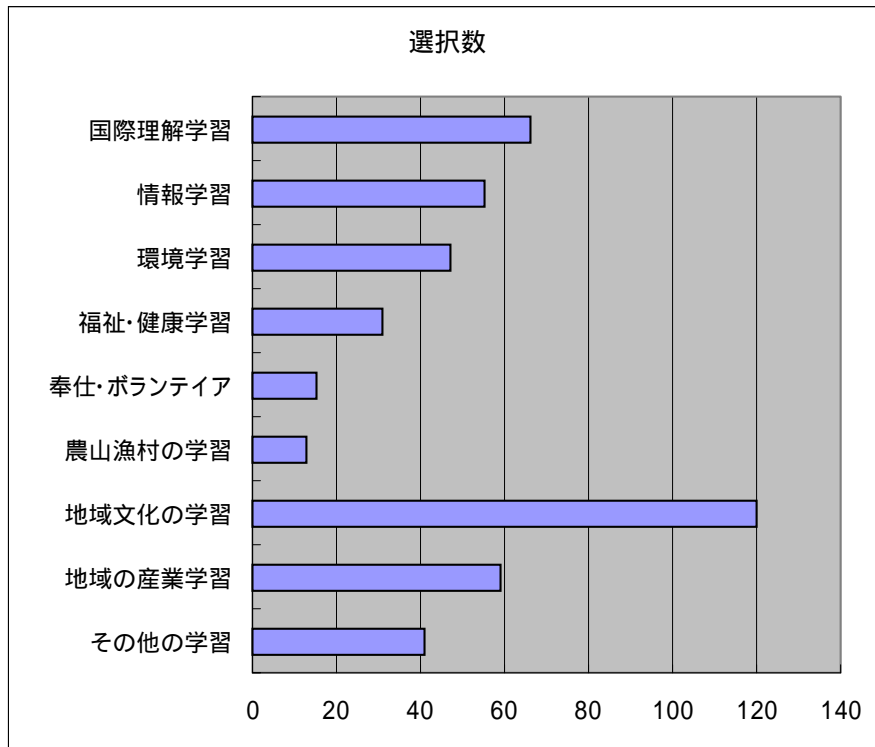
	1	2	3	4	5	6	7	8	9
選択数	66	55	47	31	15	13	120	59	41
比率	25.4	21.2	18.1	11.9	5.8	5.0	46.2	22.7	15.8

< 9 その他の学習の内容 >

- ・ 人権学習や平和学習(平和体験活動を含む) 23
ハンセン病を通して
平和(生き方)について自己探求する
生命の貴さ
- ・ 課題解決学習 2
- ・ 自然(地形・地質)学習
- ・ 観光都市を学ぶ
- ・ 文化遺産についての歴史的・風土的・文学的・美術的理解
- ・ 福島県と東京・横浜(関東地区)との比較
- ・ まとめ学習
調査研究したものをまとめて発表する学習
- ・ 情報発信学習
- ・ 歴史学習
日本の歴史(明治維新)
宗教(キリスト教の歴史)
- ・ 食育(食文化)学習
- ・ 進路学習
企業見学を通して
職業に関する知識と職業体験
- ・ 自分の生き方学習
人との出会いを通じた生き方学習

進路学習を通した生き方学習
 職場体験学習を通した生き方学習
 ラフティング体験
 飯盒炊さん体験

- ・ 郷土学習の比較追究の場、人の暮らしやすさ(街づくりの追究の場)



< 考 察 >

- ・ 「総合的な学習の時間」と関わらせた活動内容は多岐にわたり、「その他の学習」と回答した学校もかなり多い。
- ・ 調査結果からは「地域文化の学習」が最も多く、続いて「国際理解学習」、「地域の産業学習」である。
- ・ 「地域文化の学習」や「地域の産業学習」が多い事は理解しやすいが、まだまだ中学生の海外修学旅行実施校が少ない現状の中で、「国際理解学習」をあげている学校の活動内容はどのようなものなのか追究していきたい。
- ・ 「その他の学習」では平和学習が多く、「その他の学習」の中の60%強を占めている。
- ・ 「農山漁村の学習」が最も少ない数値を示したが、児童生徒の都市と農山漁村の交流の隆盛を期し農水省や文部科学省が非常に力を入れている今日、これに取り組む学校が今後多くなっていくものと思われる。
- ・ 「課題解決学習」や「まとめ学習」で発表力の育成を目指すなど、「総合的な学習の時間」で

ねらっている学習そのものを実施しているという回答も見られた。

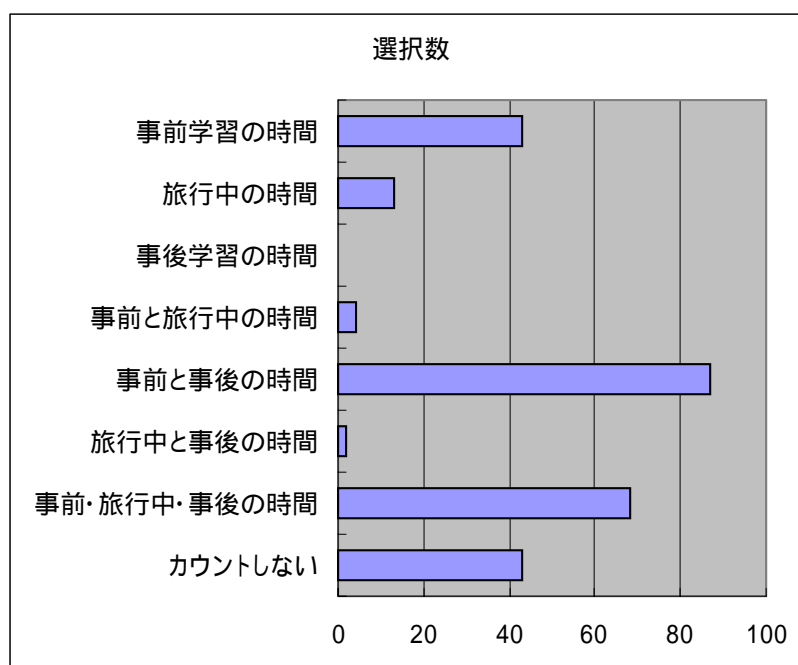
- ・ 様々な場面を通して「生き方学習」を実施し、これについても新しい教育への対応の表れと伺え、注目していきたい。
- ・ その他の中に「情報発信学習」が回答されているが、具体的な内容はどんなものなのか、追究してみたい。
- ・ 旅行中に実施する「奉仕・ボランティア」学習を、「総合的な学習の時間」と関わりをもたせているという回答が 5.8%あったが、「奉仕・ボランティア」を「総合的な学習の時間」とどのように関わらせるのか追究していきたい。次年度も引き続き調査を行い、あわせて修学旅行と「総合的な学習の時間」の望ましい関わり方の研究をしていきたい。

修学旅行を「総合的な学習の時間」の時数として含める(カウントする)場面
(複数回答)

- 1 事前学習の時間 2 旅行中の学習の時間 3 事後学習の時間

(調査の結果) 表中の比率は選択数の調査集計数に対する割合(%)

選択項目	1	2	3	1と2	1と3	2と3	1、2、3 すべて	カウント しない
選択数	43	13	0	4	87	2	68	43
比率	16.5	5.0	0	1.5	33.5	0.8	26.2	16.5



< 考 察 >

- ・「事前学習の時間だけ」を使っている学校が 16.5%あるが、「旅行中の学習だけ」あるいは「事後学習の時間だけ」を使うという場合は少ない。特に「事後学習の時間だけ使う」は0である。
- ・「事前学習の時間」と「事後学習の時間」の両方を絡めて使うという学校が 33.5%で最も多い。
- ・「事前学習の時間」から「総合的な学習の時間」として使っていく場合が多いように感じる。
- ・「旅行中の学習の時間」を「総合的な学習の時間」としてカウントしてい

るという回答数が5%あるが、どのような場面をどの程度の時間使用したのか、という点を追跡調査していきたい。

7 調査結果への対応と今後の取組み

- 1 パソコンを通した返信の不馴れの面を感じた。今後、この課題は徐々に解消されるであろう。
- 2 調査結果から傾向の概略は把握できたものの、回答校の数が少ないため、結果の妥当性・信頼性の面で非常に弱い。
- 3 今後の対応として、次年度には補助調査・追跡調査を関東・東海・近畿各修学旅行委員会を通して、当該地域の学校を対象に実施する計画である。